

鷲野 亜紀（島根県立宍道高等学校）

### 1. はじめに

*Let us* の縮約形である英語の *Let's* は、形式的には動作主体は話し手と聞き手の両方であるが、実際には 1 人称（「自分自身への働きかけ」・「申し出」）から 1・2 人称（「勧誘」）、2 人称（「婉曲な命令」、「たしなめ」）へと変化し、連続的にさまざまな機能を生じる（鷲野(2015)）。

*Let's* は、他の疑問化形式による勧誘表現と比べると短く、一語で「勧誘」のマーカーのように用いられ、また形式上の動作主体が *inclusive we* であるために語用論的な緩衝機能を持ち、さまざまな用法を拡張させる余地を持った形式である。

主節として生起する「勧誘」機能が *Let's* の典型的機能であるが、このほか、さらに次のような大変興味深い用法が見られる。ひとつは、文副詞的用法（(1)参照）で、命題に対する話し手の姿勢を外在的に示すもの、もうひとつは、従属節の命題そのものを構成する用法である（(2)参照）。

- (1) Let's be frank, Lindsey Graham is one of the top five or 10 senators.( Date 2014 (140223) NBC /SPOK: NBC)

（率直なところ、リンジー・グラハムは最も優れた 5 人、あるいは 10 人に入る議員だ。）

- (2) Let me change subjects, because let's talk about the really big story in Washington this week.(Fox\_Sunday/2004 (20040111))

（話題を変えさせて。今週のワシントンのすごい話について話し合うべきなので。）

*Let's* は、形式上は命令文であり、本来、主節において「勧誘」という発話行為としての用法が典型的であるにもかかわらず、上のような用法をもっている点については、これまでほとんど論じられていない。こうした用法は周辺のものととらえられがちであるが、*Let's* の本質と深く関わるものであると考える。本発表では、(1)のような文副詞的用法と(2)のような用法は連続的であり、(1)から(2)のような用法が拡張していったととらえるが、なぜこのような用法が生じるのか、また、どのようにして機能が拡張していったのかといった問題について、この二つの用法の検討をとおして、考察していきたい。

### 2. *Let's* についての先行研究

テキストの種類ごとに *Let's* 構文の機能と生起例を分析した De Clerck(2002)は、*Let's face it*、*Let's be honest* などの形式を、語用論的形成素(pragmatic formatives)とし、メタ言語的発話(metalinguistic utterances)であると捉えている。そして、固定化された表現の場合、共同行為の提案という発話内効力(illocutionary force)は弱まって二次的なものとなり、語用論的形成素としての用法が前面に出る、と述べている。その他、*Let's be real*などを例に、すでに行われた聞き手の行動や陳述に対する評価的なコメントとしても機能する場合があります、ある意味 *Let's* は叙述である、としている。このように、De Clerck(2002)では、*Let's* が典型的な働きかけ(action instigators)としてだけでなく、「たしなめ」「非難」といった叙述的な機能を持つ場合があることについて触れている。ここでの叙述的な機能とは、話し手が、望ましい状況を実現しようとする意図の表明であると解釈される。

働きかけの機能を持つ形式には、宮崎（2007）で＜まちのぞみ＞と述べられる、話し手の感じる望ましさが前提として存在する。*Let's* においても存在するこの前提は「叙述性」とでもいうべきものである。そこに語用論的な条件が整って「働きかけ性」が生じると、働きかけとして機能する。一方、Searle(1969)の適切性条件に述べられる「時」あるいは「人称」といった語用論的条件がずれて、過去の事象、あるいは 3 人称が動作主体となる場合、働きかけ性は生じず、前提として存在する「望ましさ」が、話し手の判断や評価として現れることになる。この場合、「叙述的な機能」が前面に出ることになるわけである。「働きかけ性」の強さによって、叙述的な機能が中心的になったり、働きかけの機能が中心的になったりすると考えられる。

*Let's* が主節に生起する場合には、主として働きかけの機能が生じていると考えられ、この場合「勧誘」が典型的な機能である。「勧誘」として機能する場合、*go* などの具体的な動作を表す動詞が使われやすい((3)(a))

参照)。しかし同じ *go* でも(3)(b)のように動作性の低い意味解釈の場合には話し手が聞き手に、話し手と共にある行為をすることを要求する「勧誘」という解釈からは離れていく。

(3)(a) Come on, Michelle. Let's go. (おいで、ミッシェル。行こう。)(Fluke, Joanne “Cinnamon Roll murder”)

(b) We -- but we need to more this, but but let's go to a commercial.

(これについてはもっと話し合う必要があるが、コマーシャルに行こう。)(NBC\_Today 2012 (120126))

(4) VAN-MARSH: Sacher says, don't entirely blame Connor's mother for Connor's obesity. SACHER: And let's face it. Many adults today don't know what a healthy diet is for themselves, let alone what they should be feeding their children. (2007 (20070316) Title Food: The Secret Struggle Source SPOK: Fox\_Zahn) (事実を認めよう。今日多くの大人は健康的な食事がどんなものか知らない。子供たちに何を食べさせるべきか、ということはもちろんのこと。)

(5) Mr-FAHRENKOPF: The first grant's \$ 140,000. (最初の寄贈金は14万ドル。)

Rev-GREY: A hundred forty-thousand -- now, let's -- let's be big. That's chump change.

(CBS\_Sixty/ 1997 (19970817))(鷲野 2015)

(14万ドル・・・もっと多くなくちゃ。それは取るに足らない金額だ。)

動作性の弱い、思考や態度を表す動詞((4)参照)においては、「勧誘」というよりは、「婉曲な命令」、あるいは「たしなめ」、さらには「評価」「判断」といった解釈がしっくりくる場合がある。(5)では、語用論的な条件のずれも加わり、すでに行われた事柄について、‘let's be big’を用いて「寄付の金額はもっと多額であるべきだ」という話し手の評価が述べられている。動作主体は3人称であり‘It(The first grant) should be big.’や、‘There should be more money.’と言い換えられる内容である。このように、*Let's*における「働きかけの機能」と「叙述的な機能」は連続的なものである。

### 3. 考察

#### 3-1. 文副詞的用法

主節に現れ、「勧誘」の機能が典型的な *Let's* が、次の(7)のように、挿入節として生起する場合がある。

(7) Well, to me, the most important one is do not follow trend, follow your body type, because not all trends look good on everybody. Let's face it<sup>1</sup>, skinny jeans do not look good on everybody, right?

(The Early Show 7:00 AM EST CBS /2008 (080117))

(実際のところ、スキニージーンズは誰でも似合うというわけじゃないですね。)

(7)においては、*Let's face it* は、それが主節に現れている(4)とは異なり、文字通りの意味ではない。話し手の命題に対する姿勢を外在的に表す機能を有している。「スキニージーンズは誰でも似合うというわけではない」という命題に対して、認めたくないことかもしれないが、それが事実であり、その事実に向かい合うべきだ、という話し手の姿勢を表し、文副詞 *actually* と類似した機能をもっている。

(7)のように、主節で述べられる命題に対して *Let's* を用いて話し手の姿勢を述べる表現はその他にもいくつかあるが、使用される形式は限定されている。Corpus of Contemporary American English(以下 COCA)で調べると、用例数の多い主なものは *Let's face it* 908 例、*Let's be honest* 132 例、*Let's be clear*<sup>2</sup> 39 例、*Let's be real* 16 例、*Let's be fair* 11 例、*Let's be frank* 10 例、*Let's admit it* 10 例であり、*Let's face*

<sup>1</sup> Macmillan English Dictionary(online) では類義・同義表現は *actually, clearly* などである。

<sup>2</sup> 2015 年 7 月 16 日の Los Angeles Times Web 版では、“What 'Let's be clear' really means”というタイトルで、イギリスの政治家たちは *clearly* という文副詞を好むがアメリカ人は *Let's be clear* をより好んで用いる、として、オバマ大統領の好むフレーズのうちのひとつ、とふれている。

it とその類似表現 *Let's admit it*、'*Let's be* + 形容詞' の形がほとんどである。これらは主節での使用があり、主節で固定化した形式としての用法が確立され、文副詞化したと思われる。

これら文副詞的用法の *Let's* 節は文のさまざまな位置に生起する。文頭、文末はもちろんのこと、助動詞の前((9)参照)、助動詞と動詞の間((10)参照)にも挿入される。

- (9) LEATHER-GLOVE SPIFF-UP Save professional cleaning for season's end. For your everyday pair (which, let's face it, will get soiled again fast), rub saddle soap on a damp paper towel to form a lather. (2012 Title Total Time Savers MAG: Good Housekeeping)

(季節の終わりにクリーニングに出さなくていいように。毎日使うものは(実のところ、またすぐに汚れるが) 湿ったペーパータオルにサドル用せっけんを付けて泡を立てるようにしてこすりましょう。)

- (10) This is about the view of Russia and how it pursues its interest around the world, which we have, let's be honest, facilitated over the last five and a half years in many respects. (2014 (140717) /Malaysia Airlines /Source SPOK: Fox)

(これはロシアの見方と、ロシアがどうやって世界中で利益を求めているのかについてのものであり、正直なところ、私たちは過去5年半ほど、多くの点でそれを容易にしてきた。)

このように文の中で比較的自由に生起する *Let's* の挿入節は、意味機能の点でも文副詞に類似している((11)(12)参照)。

- (11) And to be honest with you, it was something that was discussed within football circles, but this is the first time that it's officially now taking a certain form in this new task force.

ANDERSON: Sure. And let's be clear, this is a FIFA problem, not a Qatar problem. (2013 (131004) /Source SPOK: CNN) (はっきり言って、これは FIFA の問題で、カタール問題ではない。)

- (12) Thanks, Obama. It just felt like everyone's slamming him for things. And you're right. They didn't offer any solutions to anything. (Inaudible) But let's be real, that happens, that happens in every debate. (2015 (150917) Title HOT TOPICS Source SPOK: ABC)

(彼らは何に対しても解決策を提供しなかった。しかし、実際のところ、それは起こる。それはあらゆる討論で起こる。)

‘形容詞+ly’の形式の文副詞のうち、聞き手に対する話し手の姿勢を表す語用論的な機能を持つものを、Schreiber(1972)は Greenbaum(1969)の用語 *style disjunct* を用いて取り上げ、*frankly*、*honestly*、*truly*、*candidly* などがそれに相当するとしている。そして、動詞 *tell* と共起できる状態の副詞は *style disjunct* として機能できる、という特徴が指摘されている。これは Fraser(1996)においては、評言的語用論マーカー (commentary pragmatic markers) のうち、話者の態度マーカー (Manner-of-speaking markers) として述べられているものである。*Let's* の文副詞的な表現 '*Let's be* + 形容詞' で用いられる形容詞は、*style disjunct* に対応するものが比較的多いという特徴があるが、その中でも用法が一定のものに絞られる。*Let's face it* は上記の *style disjunct* の中に直接対応するものがあるわけではないが、*Let's be honest* や *Let's be frank* と類似した意味を持つ。これらの文副詞的な用法でみられる *Let's* の形式に共通しているのは、主節で述べられる命題内容を認めたり受け入れたりするべきだ、と聞き手に述べる強い姿勢である。それは、話し手が前提として持つ望ましさ (叙述性) の表れである。

こうした話し手の姿勢を表すのに、文副詞の代わりに *Let's* 表現を用いるのは、話し手と聞き手の両方を形式上の主語とする、ということから生じる語用論的な機能のためと考えられる。*Let's* の形式を用いることで、聞き手も話し手と同じ考えを共有しているはずであるし、そうであってほしい、と表現することになる。また、話し手の考えを一方向的に述べているのではないという、聞き手への配慮を含んだ一種の緩衝表現ともなる。さらに、話し手と聞き手は同じ社会的立場にある親しい関係である、という共感性・親しさをアピールする語用論的表現としても機能するのである。文副詞に似通った意味・機能だけでなく、さらにこうした語

用論的な意味・機能を有するために、*Let's* を用いた表現が地位を獲得したのだと思われる。

さらに、この文副詞的用法の *Let's* は、主節の中だけでなく、従属節の中にも挿入される。(14)においては、*'Because women like to dress -- dress-up'*<sup>3</sup>という従属節の中に *let's face it* が挿入されている。

(14) But I think women are the ones who are going to be less-accepting of the idea of casual dressing. Because let's face it, women like to dress -- dress-up. (NPR\_Morning/ 2000 (20001026)) (でも女性はカジュアルな服装というのにはあまり乗り気ではないと思うんです。実際のところ、女性というのは着飾るのが好きですから。)

本節でみた *Let's* の文副詞的な用法は、次の 3-2. の従属節中での用法へとつながるものである。文副詞的な用法として一般的な *Let's face it*, *Let's be honest* が、次節の従属節中にも多用されている。

### 3-2. 従属節の命題を構成する用法

(2)(再掲)は、従属節の命題そのものを *Let's* が構成している例<sup>4</sup>である。

(2) Let me change subjects, because let's talk about the really big story in Washington this week. (Fox\_Sunday/2004 (20040111))  
(話題を変えさせて。今週のワシントンのすごい話について話し合うべきなので。)

Lakoff(1984)は、命令文を含む主節現象は副詞的な従属節に生起でき、その場合それは 'statement' を伝える場合に制限されると述べている。2節で述べたように、本発表では、*Let's* には前提としての「叙述性」が前面に出た場合の「叙述的な機能」と、そこに働きかけ性が加わった場合の「働きかけの機能」が連続的に存在すると考える。

COCA の用例を調べると、従属節中に *Let's* が生起する例は、*because* に導かれる従属節中に現れる例が最も多く 70 例(うち口語:53)みられた。*because* に後続する *Let's* 節の大部分は 3-1 で用例の多かった *let's face it*, *let's be honest* などの固定化された表現である。NOW(News in the Web)corpus では、*because let's face it* は 308 例、*because let's be honest* は 101 例、*because let's be clear* が 4 例であり、やはり *let's face it* と *let's be honest* が多数を占める。この中には、述語化して従属節の命題そのものを構成する用法をもつものがあり、3-1 の機能の拡張と考えられる。

まず、3-1. の文副詞的用法で多用された *let's face it* の例をみてみることにする((15)参照)。

(15) HAZELWOOD: Well, what's very interesting is she put the video on the Internet, herself.  
O'REILLY: Of course!

HAZELWOOD: She's been very savvy. And I think the most important aspect of this story isn't necessarily that she did that. Because let's face it. A lot of women out there want to be a model, young girls, and they probably are putting their videos on the Internet.

(2012 (120214) Title Internet Video Leads to Magazine Cover /Source SPOK: Fox\_OReilly)

(そして私はこの話の一番重要な点は、必ずしも彼女がそうしたということではないと思う。なぜなら現実を認めるべきだから。たくさんの女性がモデルになりたがって、若い女性がインターネット上に自分のビデオをのせている。)

(15)においては、「彼女」がインターネット上に自分の映像をのせたことは特に重要なことではない」ことの理由として、現実はどうかと言えば、彼女に限らず多くの女性が自分の映像をインターネット上に

<sup>3</sup> 従属節を導く接続詞のうち、*Let's* との共起が最も多かったのは *because* であった。if 2 例、though 4 例、when 1 例 など、その他の接続詞との共起例は少ない。

<sup>4</sup> 鷲野(2015)では、従属節中に *Let's* が生起する例があることを指摘したが、主節での生起からの連続性を整理するに至っていない。

のせているから、「その現実を認めるべきだ」と述べている。

次の(16)は、*let's be clear* の例である。

(16) Obama blows \$5 billion a year times 10 on phony green jobs and bundler companies. And this isn't about fairness, **because let's be clear** about what Obama does. People in the private sector who are successful, whomever they are, under this president, they are second-class citizens. Apparently, the only noble citizen is a bureaucrat, a politician, or somebody on the dole. All the rest of us are stealing, are ripping people off, are too rich. And so Obama is anti-growth, anti-jobs, anti-wealth, and the record speaks for itself.

( 2012 (120412) Interview With Former Deputy Assistant Education Secretary Mark Levin/SPOK: FOX\_Cavuto)

(オバマは年間50億ドルの10倍をいんちき環境保全業と資金集めの会社に散財している。そしてこれは公平さについての問題ではない。オバマがすることについて明らかにするべきだからだ。私的セクターでうまくやっている人々は誰であれこの大統領のもとでは二級市民だ。)

(16)における *Let's* は、話し手が望ましいと思う命題内容（「オバマがすることについて明らかにする」について、「～べきである」と述べる叙事的な機能がみられる。(15)(16)のような固定化された形式が命題を構成する場合の前後の文脈をみると、まず聞き手側に議論を呼び起こすような状況を述べ、事実を受け入れるべきであると *Let's* を用いて述べた後、その事実を述べている。さまざまな反論や意見が出てきそうな文脈で、事実を述べる前に、聞き手を説得するための根拠を述べている。ここでいう叙事的な機能をもった *Let's* が *because* 節に用いられやすいのはこのような文脈と関係している。

さらに、このような *Let's* の用法は、上記の慣用的形式以外の別の動詞への広がりもみられる。たとえば、*go back to*, *talk about*, *remember*, *assume*, *take a look at*, *look at*, *bring*, *understand* といった、主に思考に関わる動詞、会話の進行に関わる動詞である。((2)参照) さらに、また、否定形も見られる。((17)参照)

(17) We've got to go after al Qaeda, wherever the hell they're at, and make sure they find no place to hide. **Because let's not forget**, the main goal of al Qaeda is to attack the United States and we're not going to allow that to happen again. (Date 2012 (121213) /SPOK: CNN)

(なぜならアルカイダの主たる目的は合衆国を攻撃することであり、私達はそんなことが再び起こることを許すつもりはないということを忘れるべきではないからだ。)

以下に、さまざまな動詞が従属節中で命題を構成している用例を挙げる。

(18) GEORGE WILL: Frank Carter was her lawyer at the time.

LINDA TRIPP: Well, it was her lawyer assigned to her by Vernon Jordan.

SAM DONALDSON: George, let me pick up on that point, **because let's see** what the President had to say. ~中略~ Here is what President Clinton said when he was questioned before the grand jury about that affidavit.

(ABC\_ThisWeek/ THE LINDA TRIPP INTERVIEW /1999 (19990307))

(ジョージ、その点を取り上げさせて。大統領が言わなくてはならなかったことを理解するべきなので。~中略~ ここにあるのは、宣誓供述書についての大陪審の前にクリントン大統領が質問に答えた内容だ。)

(19) That one -- a Bush or Clinton has been on the ballot since 1980, and is it time for a new kind of leadership, a new generation of leadership? I fully expect Hillary Clinton to say, No, **because let's go** back to the good old days of no deficits and surpluses of my husband's administration. It's going to be interesting, Obama and Clinton debating over whether or not Bill Clinton should be returned to the White House. (2007 (20070604) SPOK: NBC\_Today)

(私はヒラリー・クリントンが、そうではない、なぜなら私の夫の政権の、赤字がなく黒字財政だった、古き良き時代に戻るべきだから、と言うだろうと予期している。面白くなりそうだ。オバマとクリントンが、ビル・クリントンがホワイトハウスに戻るべきかどうかということを討論するなど。)

(20)は、Google のコーパス (Google Books American English) からの用例である。*let's not* という否定形と *be* 動詞からなる形式で、「たしなめ」というような、話し手の判断が述べられるが、その形式が従属節の中に生起している例である。

(20) But no formula exists to satisfy a separatist government, **because let's not be naive and think** for one minute that they would be interested in a formula that would demonstrate that federalism can work. (1991 John Sawatsky, Harvey Cashore "Mulroney: the politics of ambition")

(しかし分離主義者たちの政府を満足させるやり方など存在しない。だまされるべきではないし、彼らは連邦主義がうまく作用すると示すようなやり方に興味を抱いているのだ、ということを少しの間考えるべきなのだから。)

*Let's* が従属節を導く接続詞と共起する場合には、*because* との共起が多いということ、また、特定の固定化された表現が生起例の大部分を占める、という点で、3-1、3-2 の用法は共通している。また、3-1 における文副詞的用法で使われる表現は、話し手が聞き手に、主節の命題内容はまぎれもなく事実であり、それを受け入れるべきだ、受け入れることが望ましいと強く主張する表現に限られており、それは、3-2 の従属節中で命題を構成する場合にも共通していると思われる。文副詞的用法は命題に外在的であるが、それが従属節中に挿入され、命題と解釈されたとき、*Let's* は '*we should/you should*' と置き換えられるような叙述的な意味・機能を持つに至った、と考えられる。

## 5. まとめ

本発表では、主節での「勧誘」を典型とする発話機能が中心的な *Let's* の、文副詞的用法と、そこから拡張した従属節の命題を構成する用法について考察した。

*Let's face it* や *Let's be honest* など、動作性の弱い述語が使用される形式は、固定化された形式となり、聞き手に対して、主節の命題内容は真実でありそれを受け入れるべきである、という話し手の姿勢を述べる文副詞的な用法となった。さらには従属節中で文副詞的に用いられる中で、従属節中に入った文副詞的な *Let's* は述語化し、望ましい状況を実現しようとする語用論的な機能により、さまざまな動詞に用法を拡大したと考えられる。

今後、さらに命令文との生起環境の比較、多言語との比較・対照を行うことで、発話行為の機能拡張の研究に寄与することが可能であると考えられる。

## <参考文献>

De Clerck, Bernard (2002) "On the pragmatic functions of let's utterances" *Language and Computers Advances in Corpus Linguistics*

Fraser, Bruce (1996) "PRAGMATIC MARKERS" *Pragmatics* 6(2)

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George. (1984) "Performative Subordinate Clause." *Berkeley Linguistics Society* 10

Schreiber, P. A. (1972) "Style disjuncts and the performative analysis." *Linguistic Inquiry* 3

宮崎 和人 (2007) 「<まちのぞみ>と<発動>の間」『岡山大学文学部紀要』48

鷲野亜紀 (2015) 「日英語における勧誘表現の叙述的な機能について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』(39)